新藤兼人賞

SHINDO KANETO AWARDS

第９回新藤兼人賞

2004 年 12 月 9 日（金）東京會舘 11 階　ゴールドルーム

主催：　協同組合 日本映画製作者協会

特別協賛：富士フイルム株式会社／報映産業株式会社

協賛：松竹株式会社／東宝株式会社／東映株式会社／角川映画株式会社/株式会社ＩＭＡＧＩＣＡ

審査員委員会

佐々木史朗／進藤淳一／利倉 亮／三宅澄二／安田匡裕／山上徹二郎/李 鳳宇

金　賞

土井裕泰『いま、会いにゆきます』監督

受賞者プロフィール　1964 年生まれ。広島県出身。早稲田大学を卒業後、88 年 TBS 入社。美術部やテレビドラマのＡＤを経て'93 年「テキヤの信ちゃん３」で演出家デビュー。映画は本作が長編デビュー作。

主なドラマの演出作品：「愛してると言ってくれ」（95）「青い鳥」「理想の結婚」（97）「ビューティフルライフ」（00）「Friends」（02）「GOOD LUCK!!」「マンハッタンラブストーリー」（03）「オレンジデイズ」（04）など。

『いま、会いにゆきます』

製作：近藤邦勝　　製作統括：島谷能成／斎藤薫／安永義郎／亀井修／細野義朗／伊東雄三　企画：濱名一哉
企画協力：那須田淳　エクゼクティブプロデューサー：本間英行　プロデューサー：市川南／春名慶／堀口慎
原作：市川拓司（小学館刊）　脚本：岡田恵和　撮影：柴主高秀　照明：上田なりゆき　美術：種田陽平　録音：鶴巻仁
編集：三條知生　音楽：松谷卓　主題歌：ORANGE RANGE「花」（Sony Music Records/gr8!records）
製作：「いま、会いにゆきます」製作委員会（ＴＢＳ/東宝/博報堂 DY メディアパートナーズ/小学館/S・D・P/ＭＢＳ）
東宝映画作品　配給：東宝
出演：竹内結子／中村獅童／武井証／美山加恋／浅利陽介／平岡祐太／大塚ちひろ／中村嘉葎雄／市川実日子／他

2003 年に３月に発売され大ベストセラーとなった市川拓司の同名小説を映画化。
秋穂巧は妻の澪に先立たれ、１人息子の佑司となんとか幸せに暮らしていた。そんな彼らの前に１年前に逝ってしまったはずの澪が、梅雨のはしりのある雨の日に現れる。記憶を失っている彼女を優しく迎え入れ３人の不思議な生活が始まる。巧は澪に自分達の恋の歴史を語って聞かせ、やがて二人は２度目の恋に落ち、佑二は２度目の母との生活に抑えようのない喜びを感じる。６週間後、雨の季節が終わりを告げるのと共に、澪は再び彼らの前から去ってゆく運命にあった。

金賞

佐々部 清『チルソクの夏』『半落ち』監督・脚本

受賞者プロフィール　1958 年生まれ。山口県下関市出身。明治大学文学部演劇科、横浜放送映画専門学院（現・日本映画学校）を経て、'84 年より映画及びテレビドラマの助監督となる。主に崔洋一、和泉聖治、杉田成道、降旗康男などの監督に師事。'02 年『陽はまた昇る』で長編映画デビュー、日刊スポーツ映画大賞・石原裕次郎賞、日本アカデミー賞・優秀作品賞受賞。『チルソクの夏』は、生まれ故郷下関を舞台に映画を作りたいという 10 年来の夢を遂に実現させた作品。日本映画監督協会・新人賞受賞。

『半落ち』

企画：坂上順／近藤邦勝　プロデューサー：中曽根千治／小島吉弘／菊池淳夫／濱名一哉／長坂勉

原作：横山秀夫（講談社刊）　脚本：田部俊行／佐々部清　撮影：長沼六男（JSC）　照明：吉角荘介

美術：山崎秀満　装飾：湯澤幸夫　録音：高野康雄　音楽：森山直太郎「声」（ﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾐｭｰｼﾞｯｸ）　編集：大畑英亮

製作：「半落ち」製作委員会（東映・TBS・住友商事・東京都 ASA 連合会）　配給：東映

出演：寺尾聰／柴田恭兵／原田美枝子／吉岡秀隆／鶴田真由／國村準／樹木希林

2002 年、各種ミステリー年間ランキングで第 1 位を獲得した横山秀夫のベストセラーを映画化。
病に苦しむ妻を殺害したと自首してきた元刑事梶、取り調べに際し犯行を認めながらも自首するまでの 2 日は決して明かそうとしない。半年前、アルツハイマー病を発症した妻の看病の為、自ら刑事を辞して警察学校で後進の指導にあたり、広く敬愛を集めてきた梶がなぜ殺人を犯したのか。刑事や検事、弁護士、新聞記者などが犯人の内面に迫っていく。

『チルソクの夏』

プロデューサー：臼井正明　脚本：佐々部 清　撮影：坂江正明　照明：渡辺三雄　美術：若松孝市　録音：南 徳昭

編集：青山昌文　主題歌：イルカ「なごり雪 2002 年バージョン」　音楽：加羽沢美濃

製作：「チルソクの夏」製作委員会（プルミエ・インターナショナル/プレノンアッシュ/ジャパンホームビデオ/衛星劇場/マックス･エー/コード/山口放送）　配給：プレノンアッシュ

出演：水谷妃里／上野樹里／桂亜沙美／三村恭代／淳評

1977年7月7日、下関と釜山の間で行われた親善陸上大会に出場した郁子は、一人の韓国人の男の子と出会い淡い恋をする。「来年の夏、この大会で再会しよう」約束をして別れる二人･･･携帯もメールもない時代、日本と韓国が今ほど親しくなかった時代、そして日本の歌を歌ってはいけない時代でもあった。

審　査　員　講　評

審査委員長総評

佐々木史朗（オフィス・シロウズ）　（ホテルハイビスカス、ナビィの恋、コンセント、ごめん、アンテナ、他）

今年の審査会は充実したものになりました。最終的に金賞候補は「いま会いにゆきます」の土井裕泰さん、「油断大敵」の成島出さん、「半落ち」の佐々部清さんの三人でしたが、それぞれが現在に至るまでの映画との関わり方とキャリア、作品が成立した背景が大きく異なっており、それが議論の焦点となりました。結果としては異例ですが佐々部さん、土井さんの二人が金賞と決定しました。佐々部さんについては昨年「チルソクの夏」が有力な候補作品であったことも評価につながりました。クオリティの高い作品を作り続ける力量には敬意を払いたいと思います。土井さんがテレビの分野で演出してこられた作品に私たちは以前から注目していました。このような才能が映画に進出してこられたことを審査員一同は歓迎します。成島さんの作品、才能についての評価も前記の二人におとるものではありませんでした。あえて銀賞にえらばなかったのは三人の力量が伯仲していたからです。第二位として、または未完成ながら将来を期待するという意味での銀賞は同君に対して失礼になると私たちは考え、あえて銀賞該当なしとしました。
長時間の白熱した審査会を持ちえたことを私たちは喜ばしく思い、来年からのさらに新しい才能の登場を熱意を持って見守りたいと思います。

審査員講評

安田匡裕（エンジンネットワーク）　（はつ恋、ekiden、ｺｺﾆｲﾙｺﾄ、Quartet、SEOUL、卒業、深呼吸の必要、他）
選考理由：私の推薦は当初、「油断大敵」の成島出だったが、佐々部清の「チルソクの夏」「半落ち」と比べるとどうも作品的に力負けてしまう。それに成島出にはまだ2本目、3本目が期待できる。そんな訳で、結果的に私の推薦は佐々部清に落ち着いた。しかし、私が組みたいのは、やはりオリジナルを書ける作家的な監督に限定されてくる。勿論大きな理由があるがここでは割愛させていただく。そういう意味ではバーバー吉野の荻上直子にはこれからも頑張って欲しいと思った。

進藤淳一（フイルムフェイス）　（化粧師、鉄道員、秘密、大河の一滴、巌流島、命、他）
まずは受賞者のお二人におめでとうと言いたい。佐々部監督も土井監督も業界ではかなりのベテランですから「今更新人を対象にした賞なんか」と思ったかもしれませんが、謙虚に受け取って頂けたこと嬉しく思います。昨年までの応募制ではなく、今年から年間の公開作品すべてが審査対象となったという事もあり、審査会では以前にも増して白熱した討論がなされました。実際には新人監督の作品を全部見ることは不可能に近く、各自の判断で選んでみる事になるのですが、見逃してしまっている作品に対しては発言しにくい部分もあり、選考の難しさを強く感じました。今年は偶然にもメジャー公開作品が2本受賞しましたが単館系の作品にもきちんと目を向けている事をお伝えしたい。そして、新藤兼人賞がこれからも長く続き、若い人たちに憧れを抱かせる賞にしてゆきたいと改めて強く思いました。

利倉 亮　（レジェンド・ピクチャーズ）（HYSTERIC、不確かなメロディ、DOG STAR、Mrs. 他）
日本映画に客が入ると言われている環境がある。しかし、製作された作品の多くは宣伝費すら回収できない現状である。その時代に「韓流」という言葉が流行し、韓国作品を仕入れる映画配給会社が業績を上げている。また、最近ピンク映画が一般映画館でレイトショー公開される。成人映画が一般映画なみに客を動員する。逆を言えば一般映画のキャッチになる要素が弱いのではなだろうか。レンタル、セル業界ではＤＶＤ化が進み、テレビの人気バラエティ番組も映画の仕入れ枠を減少させる原因にもなっている。客の多くは、「日本映画って昔の方がおもしろいのでしょう？」と言う。予算の減少というより企画の弱さが気になる。アニメや舞台は経験を積んだ演出家が人気を集め、客に優しくストレートで楽しそうな作品が必要とされている。ストレートに作品と向かうのは体力がないとできない。今、企画者も監督も経験や実力が問われる。かといって、撮影所時代と違い大作の経験を積んでいくことが難しい時代である。今回、幸いにも経験を積んできた監督が選ばれたと思います。 佐々部監督、土井監督の今後の活躍に期待をしたいです。 おめでとうございます。

三宅澄二　（ミコット・エンド・バサラ）（ぼくんち、blue、青い春、荒神、２LDK、DOG STAR、青い春、他）
受賞者のお二人、おめでとうございます。今年は例年以上に審議が白熱し、初めて金賞二人受賞という結果になりました。佐々部監督は、「チルソクの夏」、「半落ち」の２作品が対象となりましたが、テーマ、ジャンル、ビジネス規模の違う２作品を、新人とは思えない手練れで見事に作り上げ、両作品とも高い実績を上げられたことは、特筆に値すべきことだと思います。また、土井監督はテレビではかなりの実績を上げられているものの、映画初監督であそこまで見事に、シナリオ、演出、音楽のバランスをとられ、一級のエンタテインメント作品に仕上げられたことに敬意を評します。お二人以外にも、可能性を感じさせてくれる作品がいくつかあり、今後の日本映画界の可能性を強く感じることができる審査会となりました。この中からきっと次の清水監督がでてくることを確信し、一緒にアジア、世界を目指し、チャレンジしていけることを切望しております。

李 鳳宇　（シネカノン）（月はどっちに出ている、ビリケン、のど自慢、KT、ゲロッパ！ お父さんのバックドロップ、他）
今回の選考は例年になく、真っ二つに意見が割れました。それは映画畑から育った映画や監督を評価するのか、テレビやクリップ出身の監督を評価するべきかという立ち位置の確認だったようです。またこの問題は日映協として今後どのような監督と映画に取り組んで行くべきなのかと言った、方向性にも関わる定義だったように思えます。結果的には両方を評価する形になりましたが、私自身としては大変満足しており、製作者も観客の代表なんどという事を改めて世に示す事が出来たのではないかと考えています。

山上徹二郎　（シグロ）　（ハッシュ！ 私のグランパ、チョムスキー9.11、花子、絵の中のぼくの村、風音、他）
今回の審査対象となった新人作品はおよそ 90 作品ほどでしたが、二年ほど前からの映画製作本数の急激な増加にはちょっと戸惑うほどです。今回は金賞が２作品で、銀賞は対象なしとなりました。佐々部清さんは『チルソクの夏』『半落ち』の２作品が審査の対象になり、土井裕泰さんは『いま、会いにゆきます』が対象となりましたが、甲乙つけがたいという理由から金賞お二人となりました。私見ですが、銀賞に関する審査のあり方について多少議論の余地があるのではないかと思いました。金賞は迷わずベスト１を選べばいい訳ですが、銀賞の場合金賞の次点と考えるのか、或いは金賞を選ぶ基準とはまた違った考え方で選ぶのかといった点です。たとえば作品に低予算の限界が露呈していたり、あるいは完成度が今ひとつである場合でも、その監督に将来性が期待できるといったようなケースです。当初の選定基準でも、作品それ自体の評価だけでなくプロデューサーとして今後組んでみたいと思う監督を選ぶというものでしたので、こうした点を今後の選定基準として整理する必要があるのではないかと思われます。